

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～

1 主題設定の理由

本研究主題は、急速な時代の変化や身の回りにある社会の諸問題に適切に対応し、よりよい社会の実現を目指して主体的に社会に参画するための資質・能力を育成するために設定したものである。

令和3年度は、新型コロナウイルスへの対応という、まさに未知の問題が山積する年であった。しかし、各地区・各校で工夫を凝らした研究が進められ、今年度の夏季研究協議会では意義のある実践が報告された。それらをもとに、今年度の成果と課題をまとめ、令和4年度の飛騨大会に向けた方向性とする。

◇成果

〔研究内容1-1〕

- ・アンケートによる実態調査や地域教材等を活用し、子どもが社会的事象を自分のこととして捉えることができるような教材開発を進めることができた。また、ICTを活用した学習活動を単元に効果的に位置付けることにより、より身近に感じる教材にすることができた。

〔研究内容2-2〕

- ・社会への関わり方を選択・判断する学習の実践がより一層積極的に行われ、子どもが社会への関心を高める姿が見られるようになってきた。

〔研究内容3-1〕

- ・社会への関わり方を選択・判断する授業の後の継続的な見届けによって、社会へ関わろうとする主体的な姿が育ちつつある。

◆課題

〔研究内容1-2〕

- ・単元を学習する目的意識を子どもと共有して学習を進めるために、強い問題意識を生み出すことができるような単元を貫く課題の設定や、意識が連続するような単元構成をしていきたい。

〔研究内容2-2〕

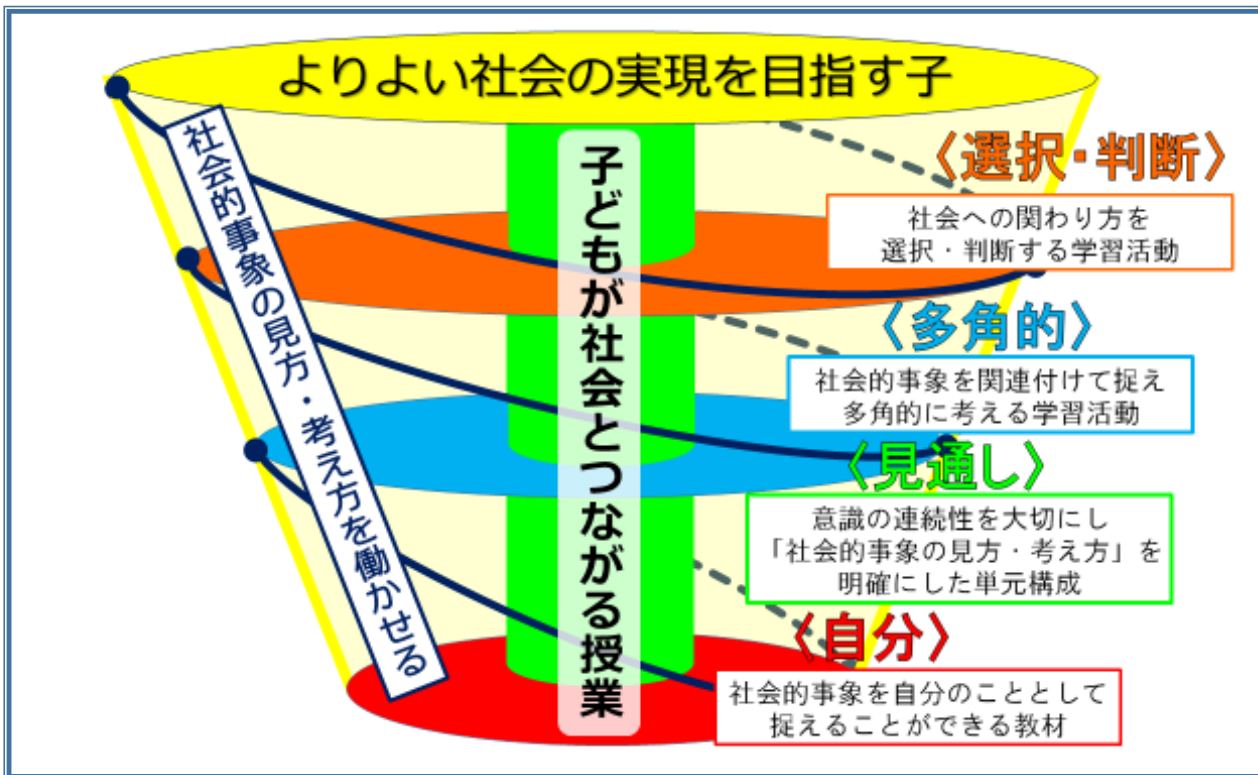
- ・社会に見られる課題に対し、単元全体で社会への関わり方を選択・判断する学習にしていくために、概念的知識を活用して社会を見ていく学習を大切に、さらに実践を積み重ねていく。

〔研究内容3-1〕

- ・「主体的に問題解決しようとする態度」の評価について、振り返りを記述することが目的とならないよう、効果的な振り返りの在り方を考えていく。

例年のような研究会等が行われない中、各教員がそれぞれ学習指導要領で求められている社会科学習の在り方について考え、実践を行うことができた。社会的事象の見方・考え方を働かせることを意識して単元を構成したり、社会に見られる課題について選択・判断する実践を行ったりすることで、令和元年度に開催した全国大会の成果を引き継ぐことができた。一方でそれらの実践には、上述のような課題点もあり、継続して取り組んでいく必要があるため、令和4年度も、研究主題及び副主題、及び研究内容について継続して取り組むこととした。

【図表1】研究主題のイメージ



よりよい社会の実現を目指す子とは
よりよい社会の在り方について考え、自らの生き方につなげていく子

子どもが社会とつながる授業とは
社会的事象を自分のこととして捉え、見方・考え方を働かせながら、その意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする授業

2 研究内容

<子どもが社会とつながる授業の具現に向けて>

研究内容1	教材化や単元構成の工夫				
(1)	社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発	自分			
(2)	意識の連続性を大切にし「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成		見通し		
研究内容2	学習活動の工夫				
(1)	社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動	多角的			
(2)	社会への関わり方を選択・判断する学習活動	選択・判断			
研究内容3	指導・援助の工夫	自分	見通し	多角的	選択・判断
(1)	社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価				
(2)	社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助				

3 研究内容と方法

研究内容1 教材化や単元構成の工夫

- (1) 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発
- (2) 意識の連続性を大切にし「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成

(1) 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発 **自分**

子どもが社会とのつながりを実感するためには、各単元で取り扱う教材を、子ども自身が自分との関わりで考えることが大切である。自分のこととして捉えるとは、子どもが主体となって「これから社会にどのように関わるか」や、「社会はどう在るべきか」について考えていくことである。

そこで、次のような社会的事象の内容を大切にして教材（単元）開発をすれば、子どもが教材を自分のこととして捉え、社会とつながる授業を具現することができると考え、【図表2】のように整理した。

【図表2】子どもが社会とのつながりを実感するための教材の在り方

	取り扱う社会的事象の内容	社会とのつながり	教材開発の留意点
①	社会に見られる課題を通して、そこへの関わり方を考えることができるもの。	身の回りで起きている出来事や社会に見られる課題に対して、自分の関わり方を考える。	子どもの発達段階や学習指導要領の内容に合っているか。
②	感動やあこがれを生み出すことができるもの。	感動やあこがれをもち、これからの自分の生き方や社会への関わり方を考える。	特定の人物の学習をするのではなく、一般化して考えることができるか。
③	既習内容や子どもの生活経験に関連するもの。	これまでに学習した内容や生活経験を生かして、社会に対する認識をさらに広げたり深めたりする。	子どもの実態を把握し、認識を広げたり深めたりすることができるか。

また、社会的事象を自分との関わりで捉えやすくするためには、他教科や他の領域との関連を考えたり、ICTを効果的に活用したりして教材化を図ることも有効である。例えば、総合的な学習の時間における「郷土学習」と関連させたり、遠方の人材と直接対話したりすることによって、より深く教材との関わりを意識することができる。

このように、社会とのつながりを教科等横断的な学習（カリキュラムマネジメント）の視点を取り入れたり、ICTの活用を選択肢に入れたりしていくことで、より効果的に、子どもが社会とのつながりを実感する教材を開発していく。

(2) 意識の連続性を大切にし「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成 **見通し**

子どもが社会とつながる授業とは、社会的事象を自分のこととして捉え、見方・考え方を働かせながら、その意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする授業である。その具現のためには、子どもが「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、問題解決していく必要がある。

そこで大切になるのが、「教師の見通し」である。教師が、単元の中で子どもたちが問題を解決するために必要となる社会的事象の見方・考え方を明確にし、それを働かせる場面を意図的に位置付けると共に、「この問題を解決したい」という意識をもち続けることができるよう、単元の学習をデザインしていくことが重要である。そうすることで、一単位時間の役割、資料や発問、教師の指導・援助が明らかとなり、子どもたちがその働かせ方を身に付けることができるような指導をすることができる。このように教師が意図的に指導をすることで、子どもは、既習内容や生活経験、導入資料をもとに予想し、何をどうやって調べればよいかを考えて追究し、解決に向かっていくことができるようになる。

こういった学習を繰り返すことで、新たな問題に出会ったときに、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、その意味を多角的に追究し、自分との関わりの中で社会に働きかけていく子どもになると考える。

教師が見通しをもつために、子どもの意識の連続性を描くと共に、単元あるいは単位時間の中で「社会的事象の見方・考え方」をどのように働かせて追究するのかを明確にし、単元構成表を作成することとした。その際の留意点は、次の通りである。

【単元構成表作成上の留意点】

- ①単元学習前と後の子どもの意識を描く。(単元のねらいを明確にする。)
- ②単元を貫く課題を設定する。(単元に応じて、社会に見られる課題を明らかにする)
- ③単位時間の役割を明確にし、学習課題や社会的事象の見方・考え方を働かせて追究するための主となる学習活動を明確にする。
- ④社会的事象の見方・考え方を働かせて追究した、出口の子どもの考えを明確にする。
- ⑤単位時間のつながりを明確にする。

社会的事象の見方・考え方を働かせるための具体的方途(学習活動等)を明らかにし、単位時間における社会的事象の見方・考え方を働かせて追究した子どもの思考を明確にするため(③・④の留意点)に、単元構成表における単位時間の表記を【図表3】のようにする。

【図表3】単元構成表の単位時間の表記内容と具体例

<p>第〇時(学習内容) <評価規準> 中心資料:</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学 習 課 題</div> <p>○社会的事象の見方・考え方を働かせるための主となる学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・【 】という視点から〇〇さんの営みを追究するために、既習内容と比べて考える。 ・同じような考えや違う考えを分類し【 】という視点を見つける。 ・【 】という視点と【 】という視点の【共通点】を考え、まとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">社会的事象の見方・考え方を働かせて追究した出口の子どもの考え</div>	<p>第Ⅰ時 私たちの食生活と水産物 <主体的に学習に取り組む態度> 中心資料: 漁業で働く人数の変化と年齢の割合</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">私たちの食生活と水産物には、どのような関係があるのだろう</div> <p>○【生産量の変化】という視点から水産業に見られる課題に気づき、単元を貫く学習課題を設定するために、[漁業で働く人数の変化と年齢の割合]の資料と[自分たちの食生活における水産物の重要性]を比較して考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;">自分たちにとって水産物はとても大切だと分かった。でも漁師さんの人数は減り、高齢化も進んでいる。どうすれば、漁業を守れるのかな。※重要語句はゴシックで表記する。</div>
---	--

主となる学習活動には、社会的事象を見る【視点】と、それをどのように(比較して・分類して・総合して)考えるのかを明確にする。さらに、見方・考え方を働かせるための方法として、[資料]や[問い],[考える対象]等を明らかにし、手立てをより具体的にするとよい。

単元で重点となる【視点】は、学習指導要領解説(内容)に表記されているゴシックの部分「～に着目して、…」の「～に」の部分にあたる。この部分については、【視点】として必ず位置付けるようにする。

【図表4】単元構成表の例

<p>単元名 環境を守る わたしたち (全6時間)</p>	<p>単元学習前の子どもの意識 食料生産の学習では、豊かな自然環境を生かす農家の取組を学習してきた。工業生産の学習では、持続可能な社会を実現するためには、環境に配慮した、工業製品の生産やエネルギー開発の大切さを知った。森林の学習では、自分たちの暮らしが森林の働きによって守られていることを知った。私たちの生活を守るためにも、環境問題は解決しなくてはいけないことは分かるけど、自分たちが解決できるようなことはあまりないように感じるし、何をしたらいいのか</p>	
<p>「第1時 水俣病」〈主体的に学習に向かう態度〉 中心資料：水俣病患者の方の写真・高度経済成長期の年表 公害とは、何だろう。 ○【公害の発生時期と経過】に着目し、公害と経済発展を関連付けて年表を読み取ることを通して、単元を貫く課題や学習計画について考える。</p>		
<p>高度経済成長期に、国民の生活が豊かになる一方で、人の健康に深刻な被害を起こした公害が起きた。なぜこんな公害が起きたのか。そして、公害が起きない社会にするにはどうしたらいいのだろう。</p>		
<p>【単元を貫く課題】公害が起きない社会をつくるには、どうしたらいいのだろう。</p>	<p>「第2時 公害の原因」〈知識及び技能〉 中心資料：水俣湾周辺地図・水俣市副読本 なぜ、水俣病は拡大したのだろう。 ○公害が拡大した理由について【川や港、工場の分布】に着目して、<u>地理的条件と地域の人々の生活（漁業）を関連付けて考え</u>、読み取った事実を時系列でノートに整理する。 工場排水の有害物質が海の魚を汚染し、それを食べた地域の人々が水俣病にかかった。私たちの生活に便利な物を生産していたけど環境にも配慮しないとイケないな。</p>	<p>「第3時 生まれ変わった水俣市」〈知識及び技能〉 中心資料：水俣資料館語り部の話・水俣市副読本 どうやって美しい水俣市に生まれ変わったのだろう。 ○水俣市の環境がよりよくなった背景について、【自治体や市民の協力や努力】に着目して、<u>過去と現在に至るまでの取組を比較しながら</u>、自治体や啓発活動を行う市民団体の活動について、調べる。 自治体や被害者、市民が、話し合ったり、条例が制定されたりするなど、公害を起こさないという意識をもって協力し合ってきたのだな。</p>
	<p>「第4時 市民の取組」〈思考力・判断力・表現力〉 中心資料：水俣市のごみの分別・住民の話 水俣病の原因にならないのに、なぜ水俣市の住民は、厳しいルールでごみの分別を行っているのか。 ○一人一人の意識の大切さに気付くために、【市民の意識と努力】に着目し、水俣市の住民が環境を守る活動を厳しく行っている理由について、複数の意見の共通点について考える。 厳しい分別に住民が協力するのは、豊かさだけを求めすぎて起きた水俣病を教訓にして、<u>自然環境を守る暮らし方を次の世代に引き継ぎたいという願いがあるからだ</u>。水俣市の住民のように、自分たちにできる環境を守ろうとする、<u>一人一人の意識と行動が、公害を起こさない社会をつくる</u>のだな。</p>	
	<p>「第5時 自分のたちの地域の取組」〈知識及び技能〉 中心資料：岐阜市環境白書 岐阜市では、どのような公害に関わる問題があり、市民や行政はどのような取組をしているのだろう。 ○市の事例について、【環境と人々の生活との相互関係】に着目し、<u>地域で起こっている環境問題の要因と市民の意識や自分の体験を関連付けて</u>、地域の公害に関わる問題点を話し合う。 校区の川でも過去に公害が起こっていた。環境に対する自分達や市民の意識調査から、公害を起こさないための意識が低いことも分かった。身近な地域の環境を守るためにどうしたらよいか考えたい。</p>	
	<p>「第6時 私たちができること」〈思考力・判断力・表現力〉 中心資料：既習資料や意識調査 岐阜市を公害のない社会にするために、誰が、どんなことをするといいのだろう。 ○【人々の協力】に着目し環境をよりよくしていくための方法について、「一人一人の意識と行動が公害を起こさない社会をつくる」という概念的な知識を基にして自分なりの関わり方について考え、提案する。 市が川を守るためのきまりを作ればいいのかと考えていたけど、川を大切にしようという地域住民の意識を育てる取り組みも大切だと思った。自分は、地域の自然環境への関心が低いので、清水川の鮎やホタルの放流に参加した仲間の感想も聞いてみたいし、自分もその行事に参加してみようと思う。</p>	
	<p>単元学習後の子どもの意識 これまで、環境問題は自分にはあまり関係ないと思ってきた。でも、環境問題を改善したり環境を守ったりするためには、自分を含め社会全体の協力が必要だと分かった。今の自分の生活を大きく変えることは難しいけれど、日々の暮らしの中に、環境により影響を与える行動になることを少しずつでも取り入れ、行動していきたい。</p>	

【図表4 単元構成表の例 作成のポイント】

<p>単元名 環境を守るわたしたち (全6時間)</p>	<p>単元学習前の子どもの意識 食料生産の学習では、豊かな自然環境を生かす農家の取り組みを学習してきた。工業生産の学習では、持続可能な社会を実現開発の大切さを知った。森林の大切さを知った。私たちの生活は、自分たちが解決できる</p> <p>見方・考え方を働かせて追究する主な学習活動 ※ [資料] や [問い], [考える対象] 等を明らかにして手立てを具体的に作る。</p>
<p>【単元を貫く課題】公害が起きない社会をつくるには、どうしたらいいのだろう。</p>	<p>「第1時 水俣病」〈主体的に学習に向かう態度〉 中心資料：水俣病患者の自伝的写真・高度経済成長期の年表 水俣病とは、何だろう。 ○【公害の発生時期や経過】に着目し、公害と経済発展を関連付けて [年表] を読み取ることを通して、単元を貫く課題や学習計画について考える。</p>
	<p>社会的事象の見方(追究の視点) ※単元で重点となる【視点】は、学習指導要領解説(内容)のゴシック体部分「～に着目して、・・・」の「～に」の部分にあたる。この部分については、【視点】として必ず位置付けるようにする。</p> <p>考え方(追究する方法) ・比較 ・分類 ・総合 ・関連付け</p>
	<p>「第3時 生まれ変わった水俣市」〈知識及び技能〉 中心資料：水俣資料館語り部の話・水俣市副読本 どうやって、美しい水俣市に生まれ変わらせることができたのだろう。 ○【自治体や市民の協力や努力】に着目して、過去と現在に至るまでの取組を比較しながら、自治体や啓発活動が行った取り組みや活動について考える。</p>
	<p>企業が、海に排水した有害な物質によって汚染され、知らないうちにそれを食べた人々が水俣病にかかってしまった。最初には、17年間もの間、水俣病は不知火海周辺に限定されていたが、次第に被害が拡大した。企業は、私たちの生活に便利な物を生産してはくれたが、利益を求めただけでなく、環境に配慮することが大切だったんだ。</p> <p>定着させたい重要語句は、出口の子どもの姿の中に、ゴシック体で表記する。</p>
	<p>「第4時 市民の取組」〈思考力・判断力・表現力〉 中心資料：水俣市のごみの分別・住民の話 水俣病の原因にならないのに、なぜ、水俣市の住民は、とても厳しいルールでごみの分別を行っているのだろう。 ○、一人一人の意識の大切さに気付くために、【市民の意識と努力】に着目し、水俣市の住民が環境を守る活動を厳しく行っている理由について、複数の意見の共通点について考える。 水俣方式と呼ばれる2種類もの分別に住民が協力するのは、豊かさだけを求めすぎて起きた水俣病を教訓にして、自然環境を守る暮らし方を次の世代に引き継ぎたいという願いがあるからだ。水俣市の住民のように、自分たちにできる環境を守ろうとする、一人一人の意識と行動が、公害を起こさない社会をつくるのだな。</p>
	<p>「第5時 自分たちの地域の取組」〈知識及び技能〉 中心資料：岐阜市の環境問題の取組 自分たちの地域の環境問題について、自分たちの地域で取り組まれている取組を調べよう。 ○岐阜市の環境問題の取組について、自分たちの地域で取り組まれている取組を調べよう。 水俣市のような産業型公害が過去には、自分達の校区の川で起こっていた。今の自分たちの地域では、都市型公害という様々な問題があることが分かった。また、環境に対する自分達や市民の意識調査から、公害を起こさないための意識が低いことが分かった。水俣市のように、みんなで協力し合ってよりよい地域にしていこうとしたい。</p> <p>・単元の中心となる(認識を深める)授業を、太枠で表記する。※研究内容2-(1) ・本単元で獲得する概念的な知識を、分かりやすく表記する。</p>
<p>「第6時 私たちができること」〈思考力・判断力・表現力〉 中心資料：既習資料や意識調査 岐阜市を公害のない社会にするために、自分たちが何をすればいいだろう。 ○【一人一人の協力】に着目し、地域の環境をよりよくしていくために、自分たちが何をすればいいだろう。 公害を起こさない社会をつくるには、一人一人の意識と行動が大切だ。自分たちが何をすればいいだろう。 評価規準 見方・考え方を働かせるための中心資料 今日の話合いを通して、川を守るためのさまりを作ることばかり考えていたけど、川を大切にしようという住民の意識を育てる取り組みも大切だと分かった。自分は、地域の自然環境への関心が低いので、清水川の鮎やホタルの放流に参加した仲間の感想も聞いてみたいし、自分もその行事に参加してみようと思う。</p> <p>単元学習後の子どもの意識 これまで、環境問題は自分にはあまり関係ないと思ってきた。でも、環境問題を改善したり環境を守ったりするためには、自分を含め社会全体の協力が必要だと分かった。今の自分の生活を大きく変えることは難しいけれど、持続可能な社会を実現するためには、日々の暮らしの中に、環境により影響を与える行動になることを少しずつでも取り入れ、行動していき</p>	

研究内容2 学習活動の工夫

- (1) 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動
- (2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動

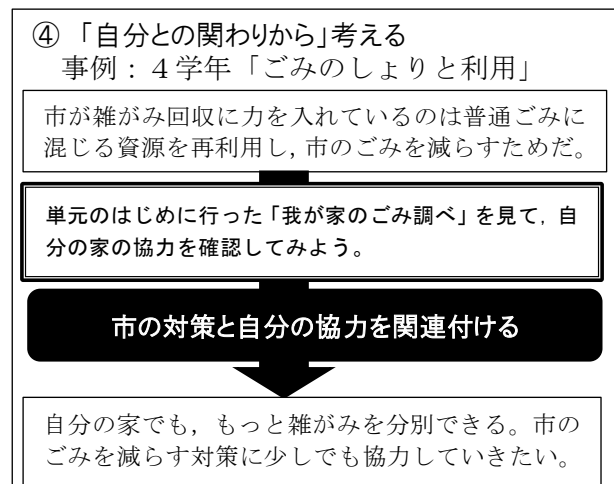
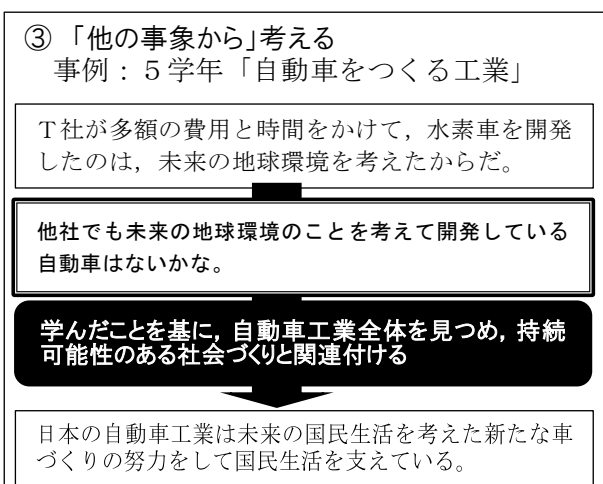
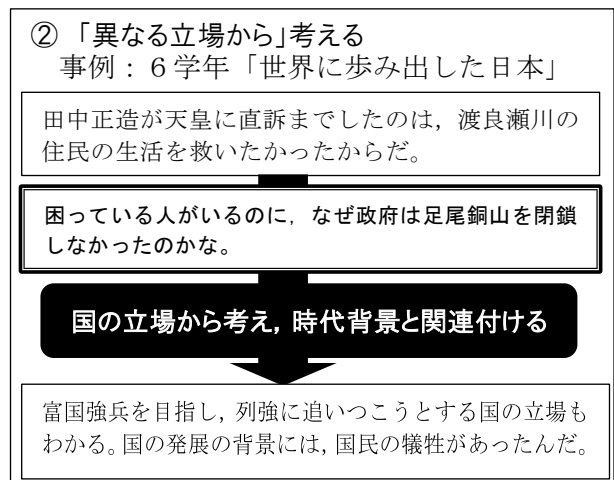
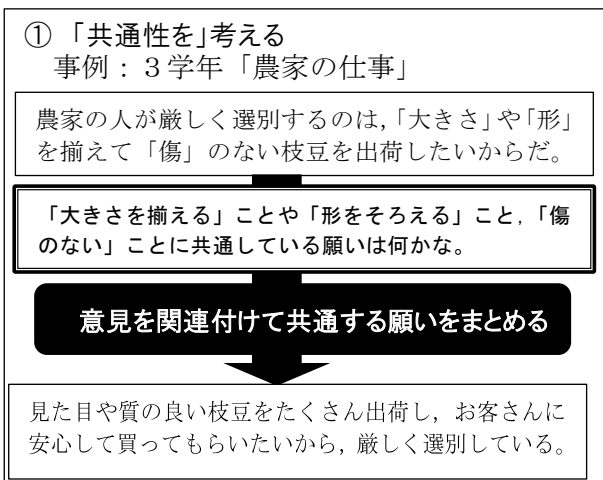
(1) 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動 **多角的**

子どもたちが社会とのつながりを実感するためには、取り上げた社会的事象の概念的知識を獲得し、それを基に社会を見つめることが大切である。そこで、単位時間（「思考力、判断力、表現力等」を養う授業を中心として）の中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味等について、対話的な学びを通して、様々な立場や意見から多角的に考える学習活動を意図的に設定することとした。その際、それまで追究してきた内容を集約したり、複数の立場や意見を踏まえて考えたりすることができるよう、【図表5・6】のように必然性を生み出す教師の発問を行っていく。

【図表5】教師の発問の視点例

①「共通性を」「順序性を」考える 様々な立場や意見の共通性や順序性に着目し、社会的事象の意味についての考えを集約する。
②「異なる立場から」考える 様々な立場の人に着目し、社会的事象の特色や相互の関連、意味について考える。
③「他の事象から」考える 別の社会的事象に転化して一般化を図り、他の社会的事象との相互の関連を考える。
④「自分との関わりから」考える 自分と社会的事象との関わりを見つめ、社会的事象の意味と自分の生活との関連を考える。

【図表6】教師の発問の具体例



(2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動

よりよい社会の実現を目指す子を育てるためには、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて、自分自身の社会への関わり方を選択・判断する力を養うことが大切である。そして、社会への関わり方を選択・判断する場を意図的に位置付けることを通して、単元で獲得した概念的知識を活用しながら、「自分自身はどのように関わればよいか」「社会の在り方はどうあるべきか」等を考えることができるようにする。その際に大切なことは、社会への関わり方を選択・判断する授業を単元全体でとらえ、学習対象と自分とのつながりを意識しながら学習を進めることである。そこで、単元を通して行う選択・判断の授業の段階を【図表7】のように整理し、大切にしたいポイントを以下のようにまとめた。

① 社会に見られる課題を単元で追究する

選択・判断



【図表7】 選択・判断の授業の段階

「社会に見られる課題」とは、地域社会における安全の確保や、良好な生活環境の維持、(中略)など現代社会に見られる課題を想定したもの。(指導要領解説より)主に単元導入で考えられるようにする。

子どもが社会への関わり方を選択・判断する際に、社会に見られる課題を自分ごととして考え、その解決に向けて、自分にできる関わり方を考えられるようにしていきたい。そこで、単元を構成するにあたり、「I 社会に見られる課題を分析し、【解決すべき事柄】と【解決すべき理由】を洗い出すこと」「II それらを単元の学習に位置付けること」を大切にしていく。以下の【図表8】に、I、IIの在り方の例としてまとめた。

【図表8】 社会に見られる課題とその分析

単元導入	社会に見られる課題 「地震災害の被害を減らしていきたい」	
学習①「過去の地震被害」	【解決すべき事柄】	【解決すべき理由】
学習②「家庭での備え」	・地震に対する危機感が少ない。	・多くの人の命や財産が奪われる。
学習③「地域の訓練」	・建物の耐震には限界がある。	・今の生活ができなくなる。
単元終末	・地域の対策について知らない。	・元の生活に戻るのに時間がかかる。
	・住民同士の協力が少ない。	

② 選択・判断する学習の一単位時間を描く

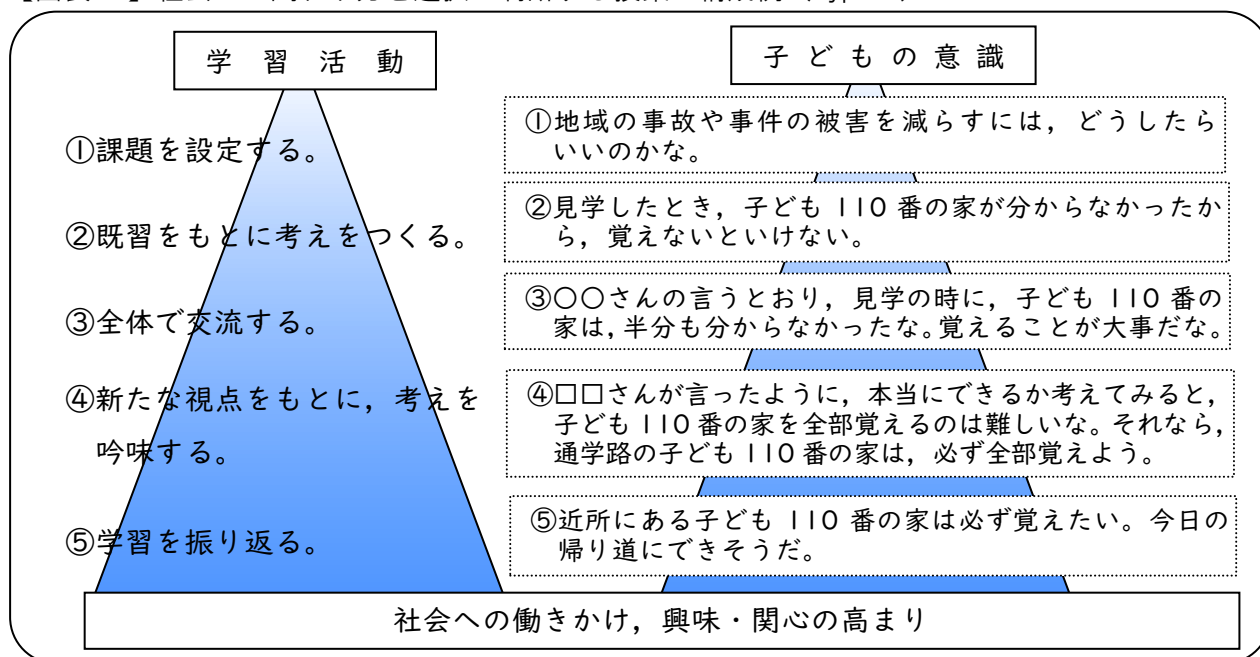
社会に見られる課題に対し、単元全体で学習したことを通して、社会への関わり方を考えていく。その際、内容の枠組みに応じて、【図表9】のTypeから、事前を選択・判断する学習がどのような展開になるのか描いておくことが大切である。

【図表9】 社会への関わり方を選択・判断する授業の具体例

Type	方法	具体例
A	社会に見られる課題に対し、自分の関わり方を考える。	[第4学年 ごみのしよりと利用] ごみを減らすために、自分にできることは何か。
B	社会に見られる課題に対し、実際に行われているいくつかの働きの中から、選択する。	[第5学年 米づくりのさかんな地域] F社が今後も生産を続けていくためには、「品質の高い家庭用米」か「大量生産できる外食用米」のどちらを作るとよいか。
C	社会に見られる課題に対し、これからのよりよい社会の在り方を考え、提案する。	[第3学年 市のうつつかわり] 〇〇市を人が住みたくなくなるような市にしていくためには、どうしたらよいか。

なお、一単位時間の授業は、【図表 10】のように構成している。

【図表 10】社会との関わり方を選択・判断する授業の構成例 (Type A)



研究内容 3 指導・援助の工夫

自分

見通し

多角的

選択・判断

- (1) 社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価
- (2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助

(1) 社会とのつながりに気付くことができる指導・援助と評価

子どもが社会とのつながりに気付くことができるようにするために、本時までの「実態」, 「学習状況」, 「定着状況」と「学習後」の各場面において、指導・援助を明確にした。

【図表 11】場面における見届けと指導・援助

実態の見届け

- ・どのような考え方をするのか。(情的なのか、論理的なのか)
- ・どのような生活経験をし、既習内容がどこまで身に付いているか。
- ・学習したことをどう活かし、広げようとしているのか。

学習状況の見届け

場面	見届ける姿	主な指導・援助
課題把握	・どのような課題を解決すればよいか明確になっている。	・「今日の学習は、理由(仕組み)について考える(調べる)といいよ」
予想	・既習内容や生活経験、導入資料と関連付けて予想している。 ・社会的事象の見方・考え方を働かせて予想している。	・「前の学習や自分の生活と比べて(つなげて)みるとどうなのかな」 ・「〇〇という見方から予想するとどうなのかな」
追究	・必要な資料を選択し、事実に基づき、社会的事象の見方・考え方を働かせて、考えをもっている。 ・仲間の考えと比較・分類・総合したり、違う立場から考えたりして、多角的に追究している。 ・授業の枠組みや、選択・判断の規準に基づいて、考えたり話し合ったりしている。	・「どの資料から考えたのかな」 「〇〇という見方から考えるとどうなのかな」 ・「～さんの考えと比べるとどう思ったかな」 「～さんの立場から考えるとどうなのかな」 ・「単元の学習内容を基にして考えるとどうなのかな」

定着状況の見届け

まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・獲得した社会認識を基に、課題についてまとめ、深めている。 ・自分（既習内容や生活経験）や、仲間の考えとつなげている。 ・社会的事象の見方・考え方を働かせることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇という、新たな視点に気づくことができたかな」 ・「自分とつなげて考えることができたかな」 ・「立場が変わると見方が変わることに気付くことができたかな」
-----	---	---

学習後の見届け

学習後	<ul style="list-style-type: none"> ・関心を高めてさらに調べている。 ・学習したことを他者に伝えている。 ・自分にできることを実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容を掲示物として残し、調べてきたことをファイリングする。 ・実践している姿を紹介し、価値付ける。
-----	--	---

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、学習指導要領解説の「目標」にも示されているように、「主体的に学習の問題を解決しようとする態度」と「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」等々を評価する。そうすることで、子どもが社会とつながるよさを味わうことができるようにしていく。

① 「主体的に学習の問題を解決しようとする態度」

「主体的に学習の問題を解決しようとする態度」については、次のような「ふりかえり活動」を大切にすること。

【図表 12】「主体的に学習の問題を解決しようとする態度」の評価と指導

評価する姿	評価の場	教師の指導
分かったこと、考えたことの変容	授業の終末で振り返りを記述する 例：「初めは、〇〇だったけど、□□ということが分かりました（できました）」 例：「ぼくは、〇〇が分かったので、□□なのだと思います。	変容の見られる記述を価値付ける。
次の学習への見通し	授業の終末で振り返りを記述する 例：「単元の課題を解決するために、次は〇〇について調べてみたいです」	さらに調べるべきことを見いだしている記述や発言を価値付ける。

上記のようなふりかえり活動を、単元の中の単位時間のねらいに応じて効果的に位置付ける。そうすることで子ども自身が自分の学びを客観的に捉えること（メタ認知）になり、主体的な学習を生み出すことにつながると考える。（但し、児童の発達段階によっては、教師がリード文を示すなど、その方法を工夫し継続して指導していくことが必要となる。）

② 「よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする態度」

「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」については、「学習後の見届け」と併せて評価規準を考えていくことが大切である。カリキュラムマネジメントの視点からも、学習したことを社会科だけに留めるのではなく、学習後の児童の姿を評価し価値付けていくことが、よりよい社会の実現を目指す子を育てることにつながる。そこで、学習後の評価の場面や方法の例を【図表 13】のようにまとめた。

【図表 13】「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」の評価と指導

評価する姿	評価の場	教師の指導
学習の広がりや深まり	単元の学習を通して分かったことや調べてみたいことを記述する。	今後、学習する単元とのつながりや他教科との関わりに目を向けるよう方向付ける。
自分が考えたことの実践	自分が考えた実践に取り組み、振り返り、家庭学習でまとめる。	実践したことを価値付けたり掲示に位置付けたりする。

(2) 社会への関わり方を選択・判断する学習活動における指導・援助

社会への関わり方を選択・判断する学習活動を通して、子どもたちが社会とのつながりを感じ、主体的に関わっていく姿を目指したい。そこで、単元全体や一単位時間において、次のような教師の役割を考えている。

【教師の役割（指導・援助）】

- ①話し合いの必然性を生み出す（社会に見られる課題と自分たちとの関わりを示す）
- ②授業のアウトラインを描く
- ③選択・判断の規準を明確にする
- ④話し合いを焦点化し、方向性を決める
- ⑤社会にかかわろうとする姿を価値付ける

■単元全体に関わる指導・援助

① 話し合いの必然性を生み出す（社会に見られる課題と自分たちとの関わりを示す）

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、社会に見られる課題を自分との関わりで捉え、実感をもって話し合いをするために、「みんなと話し合って解決したい」「何とか解決しなければならぬ」という必然性をもたせることが大切である。この必然性をもたせる場面は、単元導入、概念的知識を基に社会を見つめる授業の終末【図表7】、社会への関わり方を選択・判断する授業の導入等様々な場面が考えられる。また、子どもが必然性をもつことができるような方法や、それによる子どもの意識を【図表14】にまとめた。

【図表14】 選択・判断の授業における子どもの意識と具体例

方法	子どもの意識（必然性）	具体例
資料を提示する	社会に見られる課題について、解決方法を考えなければならない。	[第5学年 わたしたちの生活と森林] 日本の森林を守るために、大切なことは何だろう。
	未来の自分の生活のために、今考えておきたい。	[第4学年 自然災害からくらしを守る] 災害から身を守るために、できることは何だろう。
学習前の自分を見つめ直す	（社会に見られる課題を解決するために）自分にもできることがあるかもしれない。	[第3学年 事故や事件からくらしを守る] 地域の交通事故を減らすためには、どうすればよいだろう。
GTからの依頼を聞く	自分たちが考えることを通して、社会の役に立ちたい。	[第3学年 市のうつりかわり] 人々が住みやすい市にするためには、どうすればよいだろう。

② 授業のアウトラインを描く

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、その場の思いつきの判断や、科学的な根拠のない判断ではなく、それまでに身に付けた知識・技能や生活経験を基に行うことが大切である。そこで、選択・判断をする際には、「単元で習得した知識」「他教科等で身に付けた知識・技能」「生活経験」（アンケート等を活用して、生活経験を共有できる工夫が必要）を基にして選択・判断するという枠組みを決めることが必要となる。但し、初めから「この枠組みの中で判断しなさい」と強く規定するものではなく、生活経験も子どもが考える足場に含まれることから、発達段階や学習内容によっては、多少の広がりをもたせている。

■単位時間における指導・援助

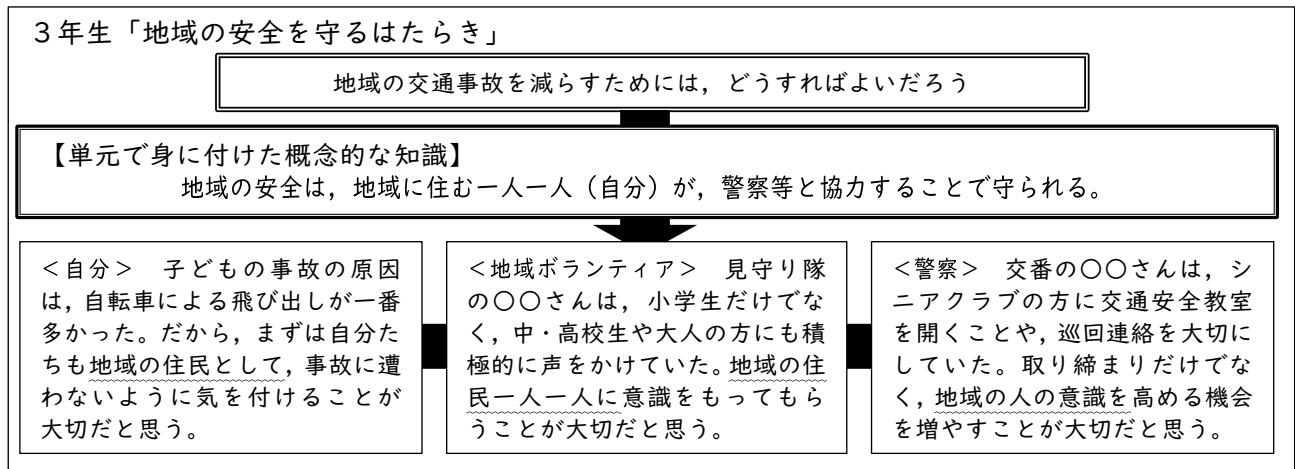
③ 選択・判断の規準を明確にする

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、子どもたちが話し合いを通して、考えを広げていくことが大切である。その際、子どもたち同士で、話し合った内容が適切かどうかを判断することが求められる。その規準は「単元で身に付けた概念的な知識」になる。（ここでいう概念的な知識とは、社会的事象の特色や意味を地理的環境、時代背景、社会背景とかがかわらせて捉えたものであり、汎用性の高い知識）教師は、この規準を明確に示すと共に、それに即した話し合いになっているかどうか

を指導していく必要がある。そうすることで、ただの思い付きの考えではなく、単元の学習を生かした適切な話し合いをすることができる。

以下【図表 15】は、概念的な知識を基に、社会への関わり方を選択・判断した授業の一例である。

【図表 15】概念的な知識を基に、社会への関わり方を選択・判断した授業例



④ 話し合いを焦点化し、方向性を決める

社会への関わり方を選択・判断する学習活動では、答えのない問題について話し合うからこそ、教師は、子どもたちが考えを発表し合って終わるだけにならないよう話し合いを焦点化し、適切に価値付けていくことが求められる。そこで、教師が示す話し合いの方向性と、それを通して子どもたちに気付かせたい新たな学びの関係性を、次のように整理した。

【図表 16】話し合いの方向性と新たな学び

教師が示す方向性	新たな学び
立場を変える／立場を整理する	複数の立場から考えることで、新たな考え方に気付く
単元を貫く課題と関わらせる	社会的事象の見方・考え方の働かせ方を身に付ける
今の自分の生活とつなげる	今の自分にできそうなことに気付く

⑤ 社会にかかわろうとする姿を価値付ける

教師は、話し合いを通して新たな学びに気付いた子どもたちの姿を、適切に価値付けることが大切である。子どもたちが選択・判断の学習活動を通して、自分のこととして社会にかかわろうとする姿や、社会的事象の見方・考え方を働かせて考えた姿を適切に価値付けることで、社会に関心を持ち続け、社会への関わり方について考える力を育成することができる。